

ている。福建省につくられた胡文虎基金会にもさつそく五百万香港ドルを寄付し、また福建で返還されたあちこちの不動産・建物等の家賃収入もすべて基金会に寄付した。さらに福建省の永泰県国際小学校、同安県河田小学校、永安市貢州中心小学、広東省の澄海市上都中学校にそれぞれ三十万を寄付して、教学ビルディングを建てるなど、福建・広東地区の教育事業の発展のためにもかなりの貢献をしていることは特筆すべきものであろう。

注

- (1) 拙稿「客家が生んだ漢民族の四大英雄―文天祥、洪秀全、孫文、羅福星の生涯―」(『アジア文化』第23号) アジア文化総合研究所、一九九八年、二四―四二頁
- (2) 拙稿「鄧小平の死と世界―中国を貧困から21世紀の主役に導いた客家の人間像」(『アジア文化研究』第5号) 国際アジア文化学会、一九九八年、一五二―一六七頁
- (3) 同注(1) 前掲論文、また、「威武不屈的文天祥」謝佐芝編『世界客属人物大全』上冊、崇文出版社、一九九四年、二九四頁
- (4) 同注(1) 前掲論文、また、「天王洪秀全」同注(3) 前掲書上冊、二九頁
- (5) 同注(1) 前掲論文
- (6) 呉海林・李延沛編『中国歴史人物辞典』黒龍江人民出版社、三

五〇―三五一頁

- (7) 拙訳「国民小学校生活と倫理」第一冊(四年生前学期用)第九課「正義―拾生取義的呉鳳」『各国社会科教科書抜粹』筑波大学発行、昭和五十五年「特定研究」資料別冊、九―一一頁参照
- (8) 謝佐芝編「四維芳伯傳略」同注(3) 前掲書上冊、三八七―三八八頁
- (9) 同注(6) 前掲書上冊、七〇二頁
- (10) 「毛澤東家族溯源」同注(3) 前掲書下冊、一三―一四頁
- (11) 張永和著『李登輝傳奇』躍昇文化事業有限公司、中華民國七九年初版、全三九一頁
- (12) 「政協副主席、葉選平」同注(3) 前掲書下冊、一五―一六頁
- (13) 「葉劍英元帥」同注(3) 前掲書上冊、三五八頁
- (14) 「胡文虎傳略」同注(3) 前掲書上冊、四〇五頁

ただ虎豹別荘に珍藏されている古文書や宝石に類だけでも、その価値ははかりしれないほどであった。香港の「八十年代」社がかつて出版した『十大富豪』という本の中で、胡仙女史と李嘉誠氏はその一人とされたのである。

胡仙は「新聞界の女王」とか「アジアで最もお金持ちの女性」とたたえられている。九龍湾新総本部には、東南アジアで最も先進的かつ完璧な規模を誇る新聞発行センターと印刷工場が建てられ、そこでは二台の高速式印刷機械がコンピュータでオートメーション化したシステムにより運行されている。アメリカのブッシュ前大統領もかつて次のように賞賛した。

「星島報業はこの半世紀来、華商社会に対して世界で最も新しいメディアを伝達しており、東アジアだけではなく、オーストラリア、アメリカ、ヨーロッパにもその業務を展開している。世界のマーケットが日増しに一体化しつつあることで、メディアの自由伝達も日増しに重要になってきている。星島系列新聞の業務のこの面での貢献は実に大きなものである」と。

なお、星島日報はどちらかといえば右寄りの反共系新聞であるが、胡仙は鄧小平の改革開放に賛成であり、したがって葉選平ら客家系華人を主軸とする華南経済圏構想も好意的にとらえている。こうしたことも星島企業グループの発展の一

因といえよう。

胡仙はここ四十数年の企業運営において常に勇往邁進してきた。だが、彼女はそれだけでは満足しておらず、なお一層の努力と発展を期して奮闘しているところである。たとえば、彼女は父親の胡文虎の「天下の財を以て天下のために使う」という精神を受け継いで、社会公益事業にも積極的に取り組んでいる。

一九九二年秋、香港中文大学とフランス国家科学センターの共同主催による国際客家学シンポジウムが、中国大陸、フランス、アメリカ、イギリス、カナダ、イタリア、オランダ、日本、シンガポール、インドネシア、そして台湾、香港等の国家・地域から百名以上の専門家、学者が招かれて、盛大に行われた。筆者も東京大学東洋文化研究所の並木教授とともに参加している。この会のために、胡仙は胡文虎基金会から五十万香港ドルを経費として寄付しており、そのおかげでとても素晴らしい成果があった。

彼女はこのシンポジウムの名誉会長として挨拶をしたが、その中で「父・胡文虎の基金会がこんな立派な客家学の学会のお役に立てて光栄です。父も大いに慰められたことでしょ」といった趣旨のことを述べており、その謙虚な口ぶりに筆者は深く感銘した。

このほかにも彼女はいろいろな慈善事業に多額の寄付をし

このような彼女の実に勤儉なる努力によって、星島系列新聞はやがて転機を迎え、「星島日報」と「星島晚報」は赤字から黒字の経営に転じた。そして、この二紙は香港の市民に最も歓迎される新聞となったのである。

星島系列新聞の名声を拡大するために、胡仙は企業家の本色を発揮して、一九六〇年代から新聞業務の改革を断行した。一九七二年、彼女は星島報業控股有限公司を設立し、その株を上場した。対外的に株主を募集したところ、大変な数の希望者が殺到し、購買認定総額は発売した株式の五十二倍にも達した。こうして十分な資金ができ、商売は日に日に繁盛し、星島報業は膨大な規模の企業に発展した。

発行紙には、星島日報、星島晚報、タイガー・ダイアリー英文虎報、中文星報、英文星報、快報、香港新区報、アジア旅遊貿易、洞察日刊等があり、その市場は香港から全世界五大州まで開拓され、とりわけ星島海外版は欧米やオセアニア等の華人地区にも業務を拡大した。さらに通信衛星によって、香港からホノルル、ニューヨーク、サンフランシスコ、トロント、バンクーバー、シドニー、ロンドンへとニュースが伝達され、続々と新聞が発行されるようになった。

こうして従来は言論を商品化した家族的色彩のきわめて濃厚だった小新聞が、彼女の手により全世界に向けた開放的、総合的な大新聞に生まれ変わったのである。星島日報は香港

人の四人に一人が読んでおり、「世界に通用する中国語新聞」と称された。胡仙のこれらの事業での成功に対して、香港政府は彼女に「太平紳士」の称号を与えた。また、英国女王も「世界第一流傑出した人物」と称し、さらに、「O・B・E勲衛」を頒布して「女の中の豪傑」とたたえている。

一九七〇年代以降、胡仙女史は経済領域で発展を続ける多国籍企業、多元化企業の目標に向かって邁進した。一九七八年、彼女はオーストラリア貨幣一億ドルで、オーストラリアにある三つのラジオ局と放送ネットの株の十五%を買い占めた。そして半年の間に会社の資産の一部を売り、八千万オーストラリア・ドルの大金を儲けた。同時に、彼女は超人的な知恵と大きな胆っ玉と不屈の闘志で多国籍・多元化の事業に乗り出した。印刷業、商業、製薬業、旅行業、飲食業等々を次々に成功させ、一躍、アジアそして全世界から注目される女性実業家のスターになったのである。

一九八七年、彼女は自分の財産を公開した強力なマスコミネットワークを持ち、長期にわたって国際華文新聞業協会主席を務める胡仙は、ついに資産十億香港ドル以上という大金持ちになった。これらの財産は主に星島報業控股有限公司の収益によるものだった。星島グループは全資本の認定株七十五%以上の子会社を二十九も有し、またはつきりとした株券のチェーン店も八つ持っている。さらに個人資産についても、

に新中国に大きな貢献をした孫文夫人・宋慶齡、フィリピンのコラソン・アキノ前大統領等はよく知られている。

ニクソン訪中の立て役者・陳香梅は米国籍客家人であり、彼女の要請によりこれに協力した廖承志、及びその母親の何香凝も客家人である。そのほかにも夫や子どものために苦勞した客家女性はいくつもない。たとえば「ネクタイ大王」と称された曾憲梓の母、藍優妹や、フィリス賞を受賞した青年数学者・丘成相の母、梁若琳もそうである。梁若琳は夫を亡くした後、毛布を編む内職をして家族を養った。また、丘成相の姉も自分の青春を犠牲にしてまで、弟の学業のために懸命に家事を助けた。そのひたむきな忍耐は日本の「おしん」の物語を思い出させるが、似たような例は数えきれないほどあり、こうした女性たちの献身的な働きが今日の客家のすばらしい人材を生み出したのである。

そこで世界第一流のジャーナリストであり、星島系列新聞の総元締めである胡仙女史について述べることにしよう。

一九三〇年代の東南アジアきつての大富豪、胡文虎、⁽¹⁴⁾胡文彪の存在は、よく知られているとおりである。彼らはタイガーパーム、八卦丹等、安くて簡単に常備できる良薬を發明し、また偉大なる慈善家としても名高い。その胡文虎の長女として生まれた胡仙は、福建省永定県下洋中川村を祖籍とする客家人である。彼女は現在、香港の「星島報業控股有限公司」

(星島新聞株式会社) の取締役局主席であり、同グループの理事長兼社長を務めている。

胡仙は一九三一年、ビルマのヤンゴンに生まれた。幼いときからとても聡明で利発だった。しかもすばらしい抱負があり、常日頃から父母の胡文虎夫婦の期待も大きかった。少女時代は香港・シンガポールに学び、一九五一年及び一九六一年から、米国のコロンビア大学とノースウエスト大学でそれぞれ新聞学を専攻した。その後、香港中文大学より名誉法学博士の学位を授与された。

一九五〇年代半ば、コロンビア大学在学中に父の胡文虎が死去、彼女は急遽、香港に帰り、父の事業を継ぐことになった。当時、胡文虎の創建した巨大な企業王国はすでに解体に向かつており、胡仙に残されたのは、ただ星島系列新聞の有限会社と、不動産といえ、唯一の建物である香港灣仔道一七九号のあまり目立たないビルだけだった。そして、その「旗艦」とも称された夕刊「星島晚報」もまた大きな負債を抱えている段階であった。かつて父のつくった「巨大な王国」——東南アジア各大都市の新聞十一社と、万靈妙薬「タイガーパーム」(万金油)の製造権は、彼女にとって、もはや昨日の夢でしかなかったのである。

こうした衰退の状況を建て直すために、胡仙は会社を家とし、昼夜となく、艱難辛苦をものともせず、真面目に働いた。

表として、南京の国民党代表と平和談判をした。

この年、広東省政府主席と広州市長を兼ねた。一九五五年には軍の最高階級である元帥に上った。一九七六年、周恩来、朱徳、毛沢東が相次いで逝去し、葉剣英は江青派の四人組による奪権の陰謀を粉碎した。そして、鄧小平、陳雲ら先輩革命功労者を推して、党と国家の指導者にもり立てた。

一九七八年三月五日、第五回人民大会常任委員会の委員長に選出された。一九八一年九月三日の会議で「台湾同胞に告げる書」を採択、国民党と共産党が対等の立場で談判する第三次国共合作を主張した。一九八六年十月二十二日、北京で逝去、享年八十九であった。

以上が、葉剣英の生涯のあらましである。現在、この元帥の子、葉選平もすでに古稀を過ぎているが、彼はまだまだ健在だ。「省長を務めるにはとくに年齢オーバーだが、全国政治協商会議の仕事は、今、私が新たに背負って立つべきものであり、私は必ず全力を尽くしてやるつもりだ」ということばは、彼のその自信を物語っているかのようである。

若さを保つ秘訣の一つは、何事にも好奇心旺盛であることだろう。葉選平は英語だけでなく、ロシア語も堪能である。彼の家のいくつかの本棚はぎっしりの書物で埋まっているが、その中には当然多くの外国の書籍・雑誌も含まれている。彼は暇を見つけると、すぐに外交資料をひもといたり、とき

にはロシア語の小説なども読んでいる。彼はまたスポーツが大好きで、とりわけバレーボールの話になると、いつも興味深く熱中するという。

自らの健康については、ユーモアあふれる口ぶりで、「七十年も使った機械だから、やはり使いにくいところもあるが、肝心なところはかえって調子が良いようだ」と言っている。技術者の彼らしい、頼もしいことばである。

なお、夫人の呉小蘭は彼の同窓生であり、同じく機械の専門家である。彼女は中国民主革命の先駆者・呉玉章の外孫でもある。かつて中国機械对外贸易公司の総経理を務め、また深圳市の副市長も経験した名媛である。

八、世界第一流の女性ジャーナリスト・胡仙

客家の女性はいろいろな面においてそれぞれ優秀なところがある。

太平天国で活躍した颯爽たる英姿の洪宣嬌（洪秀全の妹）や蘇三娘らが率いる客家出身の女性部隊は、内外の人々を驚かせた。また、封建主義の旧礼教を打ち破る女子学校を創設した葉璧華、広東・江蘇・浙江でもてはやされている詩人の范萸香、国内外ではすばらしい名声を博した女流作家・韓素音^{ハンスン}と林海音、そして世界的に名高い新聞企業家・胡仙、さら

実地に正しくやる」ことを処世訓とする葉選平のリーダーシップによるものであろう。だからこそ、広東省は彼の指導の下に中国で最も早い改革開放により成功を勝ち得たのである。

一九七六年九月九日、毛沢東が死去し、江青ら四人組が実権を握ろうとして画策したが、葉選平の父・葉劍英^⑬はみごとこれを粉碎した。その後、彼は八路軍以来の戦友である鄧小平の三度目の復活を支え、応援し続けた。そして、鄧小平が設計した社会主義市場経済論の改革開放策を支持したのが、彼の息子の葉選平だった。すなわち客家自家人の団結である。

葉選平は理論派よりも実践派である。下の幹部の報告を聞くとき、彼は常に正確な数字を要求した。彼の前では「大体」とか「おそろく」とかいうことは禁句である。こうして葉選平が指導する広東省は他の省よりも一歩進んだ改革開放に発展した。彼はもともと行政の責任者ではなかったが、「いかなる経済活動でもみな価値規律を尊重すべきであり、いかなる改革施策の選択に際しても、必ずその基準とするものがあり、十分に広大な民衆の積極性を持たせるようにする」ことこそ、その要訣であると信じていた。

一九八五年九月、葉選平が広東省長になったとき、ある外国の記者の「ご尊父はあなたにどんな影響をもたらしました

か」というインタビューに、彼は次のように率直に答えた。「客観的にいえば、父の影響はありました。私は十六歳のときに延安に行き、そこで良き革命の伝統教育を受けました。けれども、今はもう私は子どもではありません。党は私を四十年の入党経験を持つ黨員、党の幹部として見ています。私が重視されるのはそのためであり、決して私が葉劍英の子だからではありません」

ここで父の葉劍英元帥について少しふれておこう。

葉劍英は一八九七年四月二十一日、広東省嘉應州（現在の梅州市梅県）に生まれた。もとの名を宜偉という。一九一六年、父についてシンガポール、ヴェトナム、マレーシア等に行き、翌年、雲南講武堂に学び、名を劍英と改めた。卒業後は孫文に追随し、民主革命にその身を投じた。

一九二七年、ひそかに中国共産党に入党、一九三四年十月の長征では軍事委員会の第一縦隊司令になった。一九三七年、抗日戦争においては、周恩来、朱徳とともに、南京で蒋介石が催した国防会議に加わった。一九四一年二月、中央軍事委員会参謀長兼十八集團軍参謀長として、毛沢東、朱徳を助けて対日作戦を展開した。

一九四五年十二月、周恩来の中共代表团に加わり、重慶で停戦談判を担当、翌年、中共代表として、国民党及びアメリカ代表と北京で停戦協議を行った。一九四九年にも、中共代

思い出されるのは、日中国交回復後に鄧小平が来日した際、日比谷の記者倶楽部で行われた記者招待会で話したのも、やや四川なまりの客家語に近い普通話ではあったが、大変聞き取りやすいことばだったことである。当時、日本の新聞やテレビでも、「鄧小平副首相は四川省出身で、そのことばはとても聞き取りにくい……」云々という報道があったが、それは記者の不勉強であることを、筆者は翌日の早稲田大学での講義の折に、学生諸君に話した。そして「皆さんはマスコミに就職する人も多いので、このような間違いを起こさないように注意してほしい」と話したことを覚えている。

話は戻るが、葉選平は服装も身軽で質素、われわれ平民の着ているスーツと少しも変わりがなく、初対面の人にも、この華南王国、いや葉王国を牛耳っている人物という距離感や圧迫感を全く与えない。一九八〇年に広東省副省長に就任以来、要職にありつづけた苦勞は、ロマンスグレイトの頭髪にも表れているが、もとより飾らない性格の彼のこと、わざわざ染めて隠すようなこともない。記念撮影に快く応じてくれたときの様子なども、あれから八年もの歳月が流れたのに、まるで昨日のことにありありと浮かんでくる。それはおのずと人々の心を引きつけ、尊敬の念を抱かせる態度であった。

なお、「華南王国」とは、改革開放で近年めざましく発展

している華南経済圏と葉劍英・選平父子ら広東系客家を中心とする権力グループのことである。葉選平は先の全国協商会議副主席に就任後、それまでの広東省長、広東省共産党委員、会副書記を部下の朱森林に譲り、中央からの派遣を受け入れない華南王国の意地を見せた。さらに広東省共産党の最高責任者である第一書記に謝非（広東系客家人）が選出され、葉系広東派の力を誇っている。また、この華南王国の有望な実力者と見られ、中国のホープともいわれている副首相の鄒家華は、実は葉劍英の娘婿であり、葉選平の義兄である。前国家主席の楊尚昆も客家であるし、前党総書記の趙紫陽も葉選平と意志が通じており、華南王国は中央政府にしても無視できない存在となっている。

葉選平の話は簡潔にして明快、しかも謙虚である。華南経済圏の発展を促した改革開放政策について、彼は次のように語っている。「改革開放については、中央は広東省において、他の省に一步先駆けて実施した。もし近年、広東がいくらかの成績を挙げたとすれば、それは改革開放のおかげによるものだ。主要なる経験といえやはり改革開放である」

事実、華南経済圏で中国を引っばる機関車役は葉選平をおいてない。彼の広東での十一年間の厳しい仕事ぶりから、人々は「実践する人」のあだ名を送っている。広東が改革開放の先頭に立って中国の発展を促したのも、やはり「何事も

る。実力者の父・葉劍英のもと、幼時より高き教育を身につけ、一九四五年、中国共産党に入った。現在は中共中央委員会第十回の中央委員であり、広東省省長を経て、全国政治協商会議副主席の要職にある。

彼は一九四一年から延安自然科学院で機械を専攻した技術者出身である。おもな経歴を述べると、一九四四年から延安軍事委員会工業局、一九四七年から晋綏辺区第一機械工場に勤務、一九四九年、瀋陽（奉天）第一工作機械工場現場主任兼副工場長に就任、一九五一年―一九五四年、旧ソビエトに留学、帰国後は一九六〇年、遼寧省沈陽市機械局副総工程師、一九六二年、北京第一工作機械工場副工場師、一九七三年、北京市機械局指導班副組長、中共北京市機械局党委員会常務委員、一九七八年、国家科学委員会第三局局長などを歴任し、一九八〇年、広東省副省長に就任した。一九八二年には広東省広州市共産党委員会副書記、広州市長になり、一九八五年、広東省共産党委員会副書記、広東省長に出世した。

以来、十一年間の長きにわたり、中国の改革開放の先陣を切った広東省で指導的地位にあった葉選平は、一九九六年、絶対多数票を得て、全国政治協商会議副主席という高位にまでのぼりつめたのである。

葉選平はこの要職に就くに当たり、流暢な北京語（フーレンファ普通话）で次のように述べた。「政治協商会議の仕事は、私にとって

全く不案内ものだ。しかし、私はそれがとても大事な仕事であることは知っている。したがって、学ぶべきことは学び、やるべきことはやるつもりだ」

筆者は一九九一年、中山市で行われた孫中山記念中学校百周年慶祝会に招待された折、彼と会ったことがある。広州・中山市長らの広東語スピーチに対し、彼の話はとても流暢な「普通话」で、内容がよくわかったので、大いに親しみを覚えて、呉桂顕氏に紹介してもらったのである。そのとき彼が客家であることを聞いた筆者は、わざと客家語で話してみた。すると彼も快く客家語で応じてくれたので、筆者はその気さくな人柄に好感を持ったものである。

彼が「どこから来ましたか」と聞くので、筆者は「東京です」と答え、彼に不思議と思われる前に「実は故里は台湾です」と言うと、彼もすぐに納得した。おだやかでやさしいまなざしが印象的だった。

鄧小平や李鵬、そして孫文もそうであるが、一般に客家人は公的な場では客家語を使わずに普通话で話すのが礼儀であると心得ているようだ。葉選平の中山市での演説が普通话だったのも、そういった常識をわきまえてのことだろう。

葉選平が「流暢な普通话」を操ることについては、客家語は唐の時代の北方官話の古音から発展したものであるから、彼の普通话が聞き取りやすいのも当然といってよい。ここで

のすばらしさは、やはりその経済的見識の高さと実務型の性格にあるが、また生来の温厚で気さくな人柄と庶民性が国民にとけこんでいるともいえるだろう。さらに客家人特有の歯に衣着せぬ実直な物言いやストレートな気性も彼の人気の秘密ではないかと思われる。

個人的なことで少々恐縮ではあるが、直接会って言葉を交わしたときの感想と印象を記すところである。

一九九三年一月初めに、筆者は二度目の国家建設研究会に呼ばれて帰台した。そのとき参加した世界各国の学者が総統府に招待され、お茶菓子や小料理でもてなしを受けたのだが、席上、李総統は一人ひとりと丁寧に握手をしてまわった。筆者は彼が日本語の堪能な読書家であることから、かつて黃昆輝大陸委员会主任委員（現国民党秘書長）を通じて自著を謹呈したことがあったので、握手の際にそのことをたずねてみた。「以前、『儒家思想と教育』（成文堂）という拙著を謹呈させていただいたのですが、受け取っていらっしゃいますでしょうか」

すると彼はすぐに筆者の名札を手にとり見て、「ああ、あなただったのですか。確かに受け取っていますよ、ありがとうございます」と言い、もう一度、固く握手しなおした。そして、筆者の肩をたたいて、「君は実にすばらしい」と過分なほめ言葉を送りかえたのである。

筆者はまさかこんなに親しい会話ができるとは思ってもいなかったのに驚いてしまったのだが、こうして誰とでもうちとけて語り合える親しみやすさが彼の武器ともなっているのだろう。その気さくで庶民的な人柄と実直な行動力で、彼は在任中、複数政党の承認と言論統制の解除、農業発展政策と輸出産業の奨励、さらに大陸の親戚訪問の公認など、政治的にかなり思い切った改革を成し遂げた。また、三人の首相を上手に換える等、これらはまさに無血の革命として台湾史の重要な一頁を飾るものといえよう。

そして、台湾の政治的・経済的な大きな変化と発展を機に、李登輝は一九九六年三月二十三日、中国史上初めての国民直接選挙による投票で、実に五十四%という高い得票率により、民選総統として再選された。彼が今後取り組むべき最大の課題は、こじれ切った大陸との関係をいかに修復するかにある。兩岸の安定条件として大陸の要求する「三通」（通信、通航、通商）の課題にどのようにうまく対処できるかが、李登輝の総統としての腕の見せどころであろう。（一九九九、三、二〇）

七、中国経済の改革開放の先駆的役割を担った

前広東省省長・葉選平^②

葉選平は一九二四年十一月、広東省梅県生まれの客家であ

政策の場で大いにその知識と実力を発揮したのである。

一九七八年五月二十日、中華民国第六期総統に就任した蔣経国は、李登輝を台北市長に任命した。こうして本格的に政界入りした李登輝は、以後、学者から政治家への道をひた走りに突き進んでいくことになる。

なお、政官界では李登輝よりも先輩格にあたる前台北市長の林洋港は、このとき台湾省政府主席に任命され、のち一九八一年十二月、内政部長（行政院の筆頭部長）に就任した。

一九八四年五月二十日、再選された蔣経国総統は、何の前ぶれもなしに、李登輝を副総統に指名した。これはまさに晴天の霹靂であり、誰も予想だにしなかった異例の大抜擢であった。当時、彼は六十一歳だった。この件についてはいろいろな噂もあったが、紙面の関係上ふれないことにする。

さらに一九八八年一月十三日、蔣経国総統の急逝により、李登輝は副総統から総統に昇格した。六十五歳になる二日前のことであった。こうして彼は一農業経済学者から政治家へ出世街道をのぼりつめ、まさに異色の指導者となったのである。

同年七月七日、李登輝は中国国民党第十三回党員大会において党主席に選出された。中国語でいう「時勢造英雄」（時代が英傑をつくる）とは、まさにこのことである。

これには大変有名なエピソードがある。党員大会の前に行

われる中央常任委員会の前夜、中国国民党秘書長の李煥のところに、明日の党主席の決定を延期するようという緊急指令の電話と手紙が相次いだ。当時の新聞や週刊誌では、一樣にこの前夕を「最も長い夜」と報じている。結局、中央常任委員会の席上、党主席をめぐる議論がなされたが、副秘書長の宋楚瑜が規定通り党主席は李総統に決定すべきだと怒り、椅子を蹴って退出する一幕もあり、また、特にこれに反対する者もなかったため、李総統の党主席が決まったのである。宋楚瑜のこの言動は結局今日の李登輝体制をつくったことになる。

李登輝総統が党員大会で党主席に選出された翌八日、客家出身の鄧小平によって起用された中国共産党総書記、國務院総理の趙紫陽から祝電が寄せられた。それには「（李登輝）先生が中国国民党第十三回党員大会において党主席に選出されたことに對し、謹んで祝意を表します。貴我両党及び全国同胞がともに努力し、中国統一の偉業が一日も早く達成されることを、心から祈念致します」とあるように、李登輝の党主席就任に対する祝意の中に、兩岸關係改善への並々ならぬ期待がうかがえる。

一九九〇年、李登輝は国民大会代表の投票によって第八期総統に選ばれた。

台湾人はもとより、日本人にも絶大な人気を集めている彼

した。農業経済を専攻したのは、中国の最大の課題が農業問題だったからであり、京大を志願したのは、将来、同大学の校友が多い満州に行きたいと思っていたからだという。

在学中、彼はたくさんのお書物を読みふけた。農村学者・河上肇の『社会主義評論』やマルクスの『資本論』など、当時流行していた社会主義の書物も手当たり次第に読破した。もともと中学校時代からカント、ゲーテを読み、ファウストを暗誦するほどであった。

緊迫する戦局に、やがて李登輝も一九四二年十二月一日、学徒出陣で入隊し、わずか一年二ヶ月の京大での生活に別れを告げるのやむなきに至った。

一九四五年八月十五日の日本の敗戦によって、これまでに「皇国臣民」であった六百万の台湾人は、均しく中華民國の国民になったのである。

一九四六年春、李登輝は台湾に戻り、台湾大学農学院農業経済学系に編入され、一九四九年八月一日、優秀な成績で卒業した。そして、同日付で台湾大学農学部の手助に採用されたのである。

一九五一年六月、台湾の土地改革「公地放領」が実施され、公有地を耕作する農民に有利な条件で土地が譲渡された。これ以前にも、「三七五減租」（百分の三十七・五を地主に納入する政策）があったが、このたびの改革は台湾の経済発展政

策において「農業を以て工業の発展を図る」という重要な意義を持つ出来事であった。

一九五二年三月、李登輝二十九歳のとき、教育部（文部省に相当）の第一回公費留学試験に合格し、米国のアイオワ州立大学に留学した。

一九五三年一月、「耕者有其田」という孫文思想の土地改革政策が実施された。これは土地のない農民に現在小作人として耕作している土地を有利な条件で与える一方、地主は三甲（一甲は九千七百平方メートル）しか所有してはならないとするものであった。

この年の四月に、李登輝はアイオワ州立大学で農学修士号を取得し、帰国して台湾大学農学部講師として復職した。

一九五四年、李登輝は同じ客家出身の台湾省政府農村庁長・徐慶鐘の推薦で、農村庁技師兼農業経済分析係長の職に就いた。それから国連農村復興委員会技正（技正は技師より上の技術職）になり、台湾大学では助教授に昇任した。

一九六五年九月、李登輝は再び米国のコーネル大学に留学し、そこで農学博士号を授与された。帰台してからは、国連農村復興委員会に復職し、台湾大学でもそのまま兼任教授を務めた。

一九七二年六月、李登輝は行政院の農業担当の政務委員（無任相に相当）に任命され、「十大建設」と並行して、農業

九族（高砂族など）というように区別される。

客家の血を引く李登輝は、曾祖父の代に北部の客家人移住地・竜潭から台北県の三芝郷に移ったので、当地の方言の福佬語を話し、客家語は常用していないが、彼自身の客家人意識は明白である。

たとえば、一九九六年三月の総選挙では、住民のほとんどが客家人である苗栗県で支持を訴える演説をした際、「私は客家人」と客家語ではっきりと宣言していた。そして、客家人の崇拜する義民廟で当選祈願をしたほどである。

また、作家の深田佑介氏との対談インタビューでも、「アジアNEWSの『双李』といわれ、シンガポールのリー・グアンユー首相とも大変親しい交際があると聞きますが、そのあたりはどうですか」との問いに対して、「私の祖先は福建の永定県から台湾にきた客家人です。シンガポールのリー首相も客家の血筋ですから、われわれの交際にはこうしたつながりもあります。リー首相は何度か台湾を訪問していますし、私自身も昨年（一九八九年・筆者注）三月に招待を受けてシンガポールを訪問しました」と答えている。（『文芸春秋』一九九〇年五月号〔四月十日発売〕より。なお、台湾『中央日報』海外版（一九九〇年四月十一日付）にも、この記事の中国語訳が掲載された。）

さて、李登輝が生まれた当時、日本の植民地下にあった台

湾は、台湾人の「日本人化」をめざす同化政策により、教育制度も学校を整備して内地との一元化が推進された。初等教育段階において日本語を日常生活用語としない台湾人児童は、「公学校」（小学校に相当する公立学校）に通うものとし、やがて日本の敗戦色が濃くなると、公学校は内地と同じく国民学校と改称された。

李登輝の父親は日本の警察官として汐止に赴任したので、幼年時代の彼は地元の三芝公学校ではなく、父の任地の汐止公学校に入学した。日本語は上手だった。その後、父の転勤に伴い、南港公学校、故郷の三芝公学校、そして淡水公学校と、次々に転校した。

一九三五年三月、李登輝は淡水公学校での三年間を終えて卒業するが、彼の成績は百四名中二番というすばらしいものだった。しかし、台北の公立中学校の受験には失敗し、一年間の高等科を経て、私立の淡水中学校に合格した。先述の深田佑介氏のインタビューでも、彼は師範学校が難しくて入れなかったことを率直に認めている。

当時、五年制中学校は四年制に短縮され、李登輝は一九四〇年三月、淡水中学校を繰り上げ卒業した。そして台北高等学校の文科甲類の入学試験に合格したが、戦争の激化により高等学校の在学期間も短縮され、一九四二年八月、十九歳のときに卒業、同年十月、京都大学農学部農業経済学科に入学

目が覚め、中国社会全体に文革に対する疑心が急速に広がったといわれている。

一九七六年七月六日、革命の功労者、朱徳の死に続いて、毛沢東も九月九日、八十二歳でこの世を去った。長年の無理が祟り、晩年は健康を損ねてもいたが、力強い握手や明晰な記憶力は死ぬまで衰えを見せなかったという。彼は語った。

「共産党員である以上、幹部も兵士もすべて人民に奉仕することが本分である」、「人がこの世に生まれてくるのは世界を改造するためだ」、そして「千年後にまだ革命をやる必要があるか。やはりやらなければならない」と。一つの時代が終わり、毛の描いた革命の理想、もはや人民の幸福を飛び越えてしまった壮大な人間改造計画の夢も、悲劇的な暴走の果てに幕を閉じたのであった。

六、中国史上初の民選総統・李登輝^①

経済の奇蹟から政治の奇蹟をも勝ち取った李登輝は、一九二三年一月十五日、台湾の台北県三芝郡埔坪に、父・李金龍と母・江錦の間の次男として生まれた。台湾の名声を世界に高めたこの台湾民主化の旗手・李登輝の生いたちをまず見ることにしよう。

李家は六代のとき、中国福建省西部の永定県から台湾の桃

園県竜潭郷に移住し、さらに曾祖父の李乾葱の代に三芝郷に移り住んだ。祖父の李財生と祖母の楊妹の代に、三芝郷の埔坪に「源興居」を構え、それは今も残されている。（なお、台湾の客家人の女性には、ある一時期、「妹」と名前をつける習慣があった。これは日本人の女性によく「〇〇子」とつけるのと同じだが、祖母が楊妹という名であることも、李登輝が客家人であることを証明しているといつてよい。）

福建省永定県は閩西の「円楼」で名高い客家人居住地の一つである。台湾の桃園県竜潭郷も住民の大部分が客家という地域だが、李登輝は曾祖父の代に「福佬語」を常用する三芝郷に移住して四代目になるから、客家語がほとんど話せなかったというのも無理はなからう。このような現象は、台湾の客家集中地域以外の各地に散在する客家人にはよく見られるものである。

台湾の人口は二千二百万人、そのうち台湾語を使用する「本省人」（清末に中国から移住した、いわゆる台湾人）は八十五％強、主に北京語を話す「外省人」（戦後、中国から渡って来た大陸人）は十二％強である。しかし、同じ台湾語を日常生活用語とする本省人といっても、実際には、中国福建省南部の閩南語（福佬語）を話す福佬人が約七十％、やはり同じ中国の方言の一つとされる客家語を話す客家人が約十五％、残りの約三％はそれぞれ独自の言語を使用する原住民

劉派に対する攻撃を開始、軍総政治部も強力にこれを支援し、批判する者を反党反社会主義分子として摘発した。

さらに党外の自派群衆組織の必要性を感じた毛派は、一九六六年六月、毛夫人の江青らが北京大学や清華大学で直接学生に接して彼らの不満を聞き、その全責任を劉少奇個人にすり替えようと画策した。あたかも毛ならそれを解決できるかのように思わせ、学生を反実権派闘争に立ち向かわせたのである。

毛は軍を動かして第一次闘争を展開した。大衆は毛の扇動に乗り、群集心理で運動をエスカレートさせた。同年七月、実権派に総攻撃を仕掛け、八月には党中央を毛沢東・林彪中心に改組し、林を毛の後継者とすると言言した。彼の「プロレタリア文化大革命」は、手段を選ばぬ力ずくの実力行使にほかならなかった。

党中央上層部を握った毛は、次に「紅衛兵」を煽って党・行政機関を攻撃し、幹部を逮捕させた。三ヶ月で学生を中心に千五百万人まで膨れ上がった紅衛兵は、「造反有理」のスローガンを掲げて劉派を打倒した。こうして各地で文革派と実権派の闘争が起こり、六七年前半まで社会は大混乱に陥った。

一九六七年一月から毛派は軍隊を表面に出して権力を争う奪権闘争に入った。一九六八年九月五日、全国二十九の省・自治区に革命委員会の成立が宣言された。劉少奇は文化大革命

命の最大の敵としてすべての職から解任され、翌年、獄中で非業の死を遂げた。

敵は葬ったが、一度生じた混乱はとどまるところを知らなかった。結局、毛沢東によって創設された共産党は、彼自身が発動した文革によって破壊されてしまった。生まれつきの革命家・毛沢東は、反逆と闘争にかけてはまさに天才であったが、建設と調和には不向きであった。宿敵、蒋介石を倒し、国民党に勝利して、中華人民共和国の成立を宣言した瞬間に、毛沢東の革命家としての偉業は完結したのであり、その後の彼の人生は「汚れた独裁」への道をひた走るしかなかったのである。

一九六九年四月、毛沢東は再び党の実権を掌握した。後継者とされた林彪は、ナンバーツの存在を許さない毛の権力欲を見抜き、自身が抹殺される前に相手を暗殺しようとして失敗、七一年にソ連へ逃亡中の飛行機事故で死亡した。党内では、周恩来ら実務派が国家の建て直しを図ったが、その周も一九七六年一月八日に亡くなった。

周恩来の死をめぐるのは、その年の四月五日に彼を偲んで広場に捧げた花束を当局が撤去したこと、激昂した市民が放火、ついに一万五千人の軍隊、武装警官、民兵がなだれ込み、二百人余りが逮捕されるという、第一次天安門事件が起きた。これまで毛を信じてきた人々も、この事件によって

さなかでは周囲にまたとない勇気を与えもしたであろうが、ひとたび権力を握った以上は、またその権力にとりつかれていく独裁者への道でもあった。

一九五七年十一月、毛沢東はモスクワで開催された第一回国際共産党大会に中国代表として出席した。毛は第一次同様、第二次五カ年計画でもソ連による多額の支援を期待していたが、中国の急激な台頭を懸念するフルシチョフは経済援助を全面拒否し、会談は決裂した。

毛沢東は自らの力で計画を推進すべく、農村の人民公社化と「大躍進運動」を展開する。一九五八年、「社会主義建設総路線」が打ち出され、中国は工業・農業の飛躍的發展を目指して突き進んだ。それは熱気に溢れ、それなりの効果もあったが、あまりに急進的な政策はかえって中国全土に混乱と衰退をもたらした。無謀で性急な共産主義化の実験は失敗に終わり、毛を国家主席辞任へと追い込んだのである。

一九五九年、劉少奇が後継者となった。しかし、毛は党中央軍事委員会主席の地位は手放さず、国防部長に自派の林彪を据え、軍の実権を握り続けた。こうして軍内部における毛・劉両派の対立が深まっていく。

一九六一年から一九六五年は、中国共産党の自己批判による調整時期であった。劉少奇は経済の苦境から脱却するため

に思い切った自由放任政策を採り、緩やかな国家建設を目指すとして努力した。こうした調整政策により経済は徐々に好転していった。

しかし、同時に、この時期は第二の革命、「文化大革命」の準備期間でもあった。毛は農村や都市における資本主義的なものの復活を階級闘争によって阻止しようとし、その信念と強烈な権力欲からライバル・劉少奇を粛正せずにはいられなかったのである。文革の嵐は一九六六年から一九七七年まで十年余りも吹き荒れ、二千万人もの死者と数千万人の負傷者を出して、中国社会全般に取り返しのない混乱と破壊をもたらした。

彼は「継続革命」や「人民の奉仕」といったスローガンを掲げて、劉の調整政策に反撃を加える一方、自身のカリスマ性強化のため個人崇拜の高揚にも努めた。国家主席を辞任したものの、政府の失策はあくまで政府の責任で、毛自身は相変わらず建国の神様のように崇められていた。一九六四年に上梓された『毛沢東語録』などにより洗脳された若者は、革命への献身と毛への忠誠を誓い、号令に従った。毛の権力復活への執念は、党と政府を合法的に掌握している劉に、大衆運動と軍を使ってクーデターを仕掛けるといふ過激な手段に現れる。

一九六五年十一月、文化大革命が発動された。毛派の手中にある「紅旗」「上海文匯報」「解放軍報」の三紙を舞台に、

時期には、毛沢東のモスクワ訪問、中ソ友好同盟の締結でソ連の援助を得るとともに、国内の秩序を保ちながら中国を段階的に改造していく計画であった。しかし、一九五〇年六月、朝鮮戦争が勃発し、中国もこれに参戦したため、急進的な「五大運動」の改造計画を推進せざるを得なくなった。

それは地主を廃し、農民を保護する「土地改革運動」、国民党員その他の「反革命分子鎮圧運動」、朝鮮戦争による「抗米援朝運動」、公務員の汚職、浪費、官僚主義と民営商工業者の贈賄、脱税、国有資材窃取、加工や材料のごまかし、国家経済情報窃取に反対する「三反・五反運動」、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想を人民に植えつける「思想改造運動」である。五大運動は功を奏し、新中国は新たな建設へと移行する政治的・経済的・社会的基盤を作り上げた。

一九五三年から「過渡時期総路線」が打ち出され、「第一次五カ年計画」が実施された。大規模な建設を開始するに当たり、中国は新民主主義から社会主義への移行問題に取り組むことになる。

一九五四年九月、最初の全国人民代表大会が開催され、憲法の制定とともに、国家主席兼国防委員会主席に毛沢東、副主席に朱徳、全人代常務委員会委員長に劉少奇、國務院総理に周恩來らが選出された。

社会主義改造運動は農業分野を中心に加速度的に急展開し

ていき、これにつれて手工業・私営商工業の面でも公私合営化への改造が加速された。しかし、急速な社会主義化は多くの摩擦を生じ、党の内外から反対の声が挙がった。

「第二次五カ年計画」に向けて、知識人の協力と先進国からの技術導入の必要性を痛感した毛沢東は、一九五六年、「百花齊放・百家争鳴」運動を提唱し、知識人から積極的な意見を引き出して文化分野の水準を高める政策を実施した。いわゆる言論の自由を提唱して、国家建設に欠かせない知識人の支持を得ようとしたのだが、急激な社会主義改造に対する彼らの不満は予想以上に大きく、政府への批判を爆発させるきっかけになってしまった。その批判の矛先が共産党の一大独裁や毛個人にまで及ぶや、政府は徹底した知識分子弾圧の反右派闘争へと方向転換し、多くの知識人が犠牲になった。

最初は柔軟な姿勢を見せても、形勢が不利と見るや、あくまで強硬に自我を通す。水泳の得意な彼はこの年、初めて長江を泳いで横断し、「長江は大きい、大きいからといってこわいものじゃない。皆がこわいと思っているものでも、実際に当たってみれば大したことはない」「大風も大波もこわくない。人類社会は荒れ狂う荒波の中で発展してきたのだ」と語ったという。苦しいからこそ進歩があると考え、どんな困難ものともせず、立ち向かっていく。それは革命闘争の

各地に起こり、翌年七月、とうとう内戦が始まった。

はじめは二十三万の大軍を擁する国民政府軍の優勢であったが、次第に国内で蒋介石の国民党とアメリカに対する反感が高まり、毛は巧みな戦術で国府軍を打ち破っていく。苦しい転戦のさなかにも、毛は農民たちと腹を割って接し、農村から都市をを包囲する「人民戦争」を展開した。

漢 共産党の誕生から勝利の日までの二十八年間に、彼の「戰略家」としての才能はいたるところでいかに発揮された。毛沢東の特質は、軍人と政治家のリーダーが一体となつていくところである。いわば政治性を身につけた軍事のスペシャリストという一面が毛にはある。

鍾 護衛長の林銀橋によると、敵の無線傍受を警戒して仮名を使っていた毛が、一九四七年の夏、副総司令からの電話で初めて本名を名乗ったとき、形勢の逆転を実感したという。遼瀋、平津、淮海の三大戦役に勝利し、一九四八年十二月、毛は国民党に事実上の無条件降伏を要求した。翌年四月、共産党の人民解放軍は揚子江を渡って中国本土を制圧、中華民国政府は南京から広東、重慶、成都、台湾へと移った。

毛は「雄大なる詩人」でもあり、多くの有名な詩を残している。勇壮で気宇の大きいその詩風は、革命家・毛沢東の楽天的でロマンチストの一面を示すものである。詩やスピーチの才能は、民の心を惹き付け、熱狂させるカリスマ性的一条

件ともなる。ここでは南京解放を記念して作った七言律詩を紹介しよう。

鍾山風雨起蒼黃（南京東郊の紫金山に風雨が巻き起こり、すさまじい勢いである）

百万雄師過大江（我が百万の大軍は威風堂々、長江を渡る）

虎踞竜盤今勝昔（虎がうずくまり竜がとぐろを巻く南京の地も、今は昔の語りぐさ）

天翻地覆慨而慷（天は翻り地は覆る、我が軍の士気はいよいよ高く）

宜將剩勇追窮寇（徹底的に敵を追いつめよ）

不可沽名學霸王（虚名を得ようと、西楚の霸王に学んではならない）

天若有情天亦老（戦争はかくも残酷なもの、天に情があれば天もこのために老いるのだろう）

人間正道是滄桑（人の世の道理はつまるところ変化、不断の革命にこそあるのだ）

一九四九年十月一日、中国共産党の指導の下、中華人民共和国が北京に成立した。苦しい生活に喘いできた庶民は「大いなる救いの星、毛沢東万歳！」と叫び、解放軍を熱烈歓迎した。

建国の第一期、一九四九年から五二年までの国民経済回復

はならない。8、捕虜を虐待してはならない」であり、これらのスローガンには、人民の生活を重んじた彼の姿勢がよく現れている。それは後の「人民解放軍総部訓令」の元となり、今日まで中国軍の伝統的な規律となった。

毛沢東は後に、中国共産党が敵に打ち勝つ重要な法として「統一戦線、武装闘争、党の建設」の三つを挙げている。井冈山周辺及び江西省の山岳地帯における国民党軍との五回の討伐戦をゲリラ戦で凌ぎ、一九三一年十二月、瑞金に中華ソビエト共和国臨時政府が成立した。しかし、中共に対する蒋介石の包囲攻撃はますます激しくなり、ついに一九三四年十月、紅軍は「二万五千里の長征」、いわゆる大西遷の途につくことになる。

困難な逃亡の日々の中で、長征軍は一九三五年一月、貴州省の遵義に着いた。ここで行われた「遵義会議」で、毛は周恩来、朱徳と結び、実質的に中共中央における政治・軍事の指導的地位を確立するに至った。

十月、遠征の敗残部隊は陝西省延安にたどり着いた。以来、彼は一九四九年の勝利の日を迎えるまで、この地で全軍の指揮を取るようになる。延安時代の毛は薄暗い洞窟の中で、煙草の煙に巻かれながら（彼は大変なヘビースモーカーだった）、読書と思案に耽る原始的な生活を送ったという。夜型の彼は夜になると生き生きとして、軍事上の作戦を練り、ま

た著述に没頭した。『実践論』『矛盾論』『中国革命と中国共産党』など、彼の代表的な論文はほとんどこの頃に書かれている。衣食住には無頓着で質素な暮らしながら、洞窟の中にも情報網は張り巡らされていて、情報収集に余念がなかった。これは彼の生涯に一貫した姿勢である。

毛沢東は党の組織を改め、ライバルを廃して、中央委員会、書記処、政治局、軍事委員会の四つの主席を独占した。そして「マルクス・レーニン主義の中国化」をスローガンに党内の統一を図った。一九四五年には、党規約に毛沢東思想を中国共産党の指導的思想として明文規定し、毛は政治と思想の指導権を掌握、真の独裁的地位を確立するのである。

一九三七年から八年間に及ぶ日中戦争は、中国共産党と国民党の力関係を逆転させる転機になった。都市部の国民党の地盤は日本軍によって壊滅的な打撃を受けたが、共産党は農村を中心に勢力を拡大していった。そうした中で、抗日統一戦線のための第二次国共合作が成立した。だが、「一方で団結、一方で闘争」というように、本音はあくまで共産党の発展のためであり、国民党への対応と抗日の戦闘は口実に過ぎなかった。

一九四五年八月、日本の無条件降伏で日中戦争は終わりを告げる。中国は戦勝国となったが、損害はあまりに大きかった。その上、日本占領地域の接收をめぐる国共間の衝突が

路線が後の成功の一因になったことはよく知られている。

学生時代の毛は、英語も数学も苦手だが、作文や詩作には非凡な才能を示し、そして何よりも膨大な読書量と厳しい肉体の鍛錬で他を圧倒した。演説の才もあったといい、なにか青年毛沢東を内部から突き動かしていたエネルギー、使命感のようなものを感じさせる。清朝の崩壊と外国の圧力にさらされた祖国中国の現状、激情家で革命的伝統を重んじる湖南客家人の気質、暗い家庭環境の生い立ちによる人間不信と学歴コンプレックス、それらが相まって「変革」への欲求が次第に高まっていったのではなからうか。そうした中で出会ったのが、ソビエトの共産主義、マルクス・レーニンの社会主義だったのである。

一九二〇年、毛沢東は学生運動として発足した五四運動の中で、湖南の学生運動のリーダーとなる。この運動は結局実を結ばなかったが、彼はここから「知識人が労働者、農民大衆と結合しなければ何事も成し遂げられない」という貴重な教訓を得た。

一九二一年、中国共産党第一回大会が開かれ、毛は長沙代表として出席した。その後、自力発展の限界を悟った共産党は孫文の国民党との連合戦線を模索、二二年から二七年までの第一次国共合作が成立する。この間に共産党は党員数を飛躍的に増やし、毛は党中央委員に初当選して政界登場を果た

した。まもなく国共は分裂し、彼も故郷に隠退するが、国共合作期における国民革命軍への湖南省土着の農民、工人たちの熱狂的支援は、農民運動の創始者である毛沢東の力によるところが大きかった。

連合戦線の崩壊、蒋介石の徹底的弾圧により、地下に潜った共産党は秘密結社として工作を続けた。毛は湖南の農民運動を再組織し、中国最初の労働連合軍を作り上げ、一九二七年秋の蜂起に失敗した後は、湖南・江西両省境の井冈山に隠り、ここをゲリラ戦の根拠地とした。

翌年、同じ客家出身の朱徳の軍隊が合流し、毛が党代表、朱が軍長となつて、中国第四軍の紅軍（赤軍）が成立、厳正な軍紀と土地改革の実施で農民を味方に付けてゆく。この紅軍の軍紀として有名なのが、毛沢東の「三大規律、八項注意」である。

すなわち、「1、命令には服従せよ。2、人民からは針一本、糸一本でも没収してはならない。3、没収したものはすべて提出せよ」及び「1、宿営した人家を出る際は戸や藁筵などすべて元通りにしておくこと。2、人民には丁寧な接し、できるだけ援助すること。3、借りた物は必ず返し、損傷したものは必ず弁償すること。4、交渉には誠実であること。5、衛生を重んじ、特に便所は移動するとき土砂で埋めておくこと。6、農作物を痛めてはならない。7、婦人に戯れて

流水遊龍闢宝車（流水に遊ぶ龍のごとき宝車）

さらに客家山歌のように風土の匂いを多分に含む新詩の提唱など、まさに詩壇に新風を巻き起こした風雲児でもあった。康有為は、彼の詩が国家を憂い、民族の運命を悲しみ、庶民の生活を憐れむ、まさに歴史と時勢に対応した作品であるのも、世界各地を遊歴した彼の広大にして深遠な詩の心が、人々を感動させるのだとして、その清新な詩風をたたえている。

黄遵憲の詩は日本人にもこよなく愛されている。たとえば、元群馬の高崎藩主（後の群馬県知事）で男爵の大河内輝声（源桂閣）は、黄遵憲の編纂した詩集『日本雑事詩』を大いに愛読したことで有名である。

梁啓超は黄遵憲の墓誌銘の中で、次のように彼をたたえた。「先生は長く国外におり、上下の情形、隠密なところまで詳知しているので、何事もうまくこれを対処し得た。……」

黄遵憲は詩壇革命の旗手だけではなく、いまでも多くの在外外交官のすばらしい手本であり、鑑でもある。

五、雄大なる詩人、戦略家、そして汚れた独裁者・毛沢東

良くも悪くも現代中国の歴史に最大の足跡を残したリーダーは毛沢東である。「中国の赤い巨星」と呼ばれた彼の存在

なくして、今日の中国はあり得ない。その強烈な個性とどびぬけたカリマスの支配は何によってもたらされたのであろうか。

毛沢東は一八九三年十二月二十六日、湖南省湘潭県に農家の長男として生まれた。族譜の研究から彼は客家の血を引いていることが近年明らかになった。¹⁰父は仕事熱心で貧農から小地主にまでなった男である。そのため経済的にはいくらか恵まれてもいたが、自己中心で怒りっぽく、家族や他人に冷たい父親に、少年時代の毛はたえず反発を感じていたという。

八歳から私塾に通い、「四書五経」を学んだ。何でもよく覚えたが、毛は儒教の古典よりも『三国志』や『水滸伝』の方が好きだった。彼の戦略家としての資質はこの頃から芽生えていたのかもしれない。

父親とは結局うまくゆかず、十四歳で家を飛び出している。その後、仕送りも途絶え、苦学しながら湖南師範学校に通い、卒業後は北京大学図書館の事務員になった。その意味で、彼はいわゆる大学出のエリートではない。知識人に多い留学体験ももちろんなかった。

毛は湖南の農家に生まれ育ち、土着の性格を色濃く持っている。歴史的にも、湖南農民には革命に対して積極的な気風があった。この農村にしっかりと根を下ろした彼独自の革命

黄遵憲は華僑の出入国の便宜を図るため、シンガポールの華僑に氏名を登録させ、名簿を作成し、パスポートを発行した。これは華僑に初めてパスポートを所持する制度がつけられた史実である。このように彼は華僑のためにいろいろな策を講じて保護した。

また、当時のシンガポール一帯に華僑が上陸する際、よく上陸艇で金銭を奪われ、殺される事件があった。これについても、黄遵憲はイギリスの官憲と渡り合い、今後、上陸艇の所持者は航行の保証を要求し、その保証金として一千元を取ることにした。こうしてついに上陸艇の強盗殺人の悪習は根絶したのである。

当然、黄遵憲のこれら一連の華僑保護策に対し、植民主義者もいろいろな難問を押しつけた。彼の行為を越権行為だと指摘したり、中国の総領事が干渉すべきではないという公告文を出したりもしたが、黄遵憲は国際公法に基づいて、臆するところなく彼らと渡り合った。

このように一外交官たる者が外国であらゆる方法を用いて華僑を保護したことは、外交官として当然の義務とはいえず、実に偉大なことであつた。シンガポールの華人で客家の姚美良氏は、黄遵憲の史伝の展示会を日本でも開催することを企画している。

彼はまた近百年の西洋の急激な進歩を見て、戊戌変法に参

加した維新派である。一八九四年（光緒二十年）、上海に帰り、翌年、強学会に加入し、康有為と識り合った。そして汪康年と「時務報」を創刊し、「湘学报」の督辦に就任して、政治改革につとに従事した。

一八九五年（光緒二十一年）、黄遵憲はドイツ駐在の大臣クラスに任命された。彼はドイツが膠州港を手に入れようと企んでいるのを見破り、すぐさま清政府に対策を練ったので、ドイツの企みは失敗した。

さらに一八九八年（光緒二十四年）、日本駐在の公使に任命されるが、上海で病にかかり、赴任することができなかった。その上、政争の渦に巻き込まれ、後に疑いは晴れたものの、彼は官を辞して故郷に帰り、一九〇五年（光緒三十一年）二月二十三日、逝去した。享年五十八歳だった。

遺著に『入境廬詩草』十一卷、『日本国誌』四十卷、『日本雜事詩』等がある。斬新な思想の持ち主だった黄遵憲は、優秀な外交官であると同時に、著名な詩人でもあった。

彼はこれまでの擬古主義的詩風を排し、現実の社会生活を反映すべきことを強調した。そして杜甫のように国を憂い、民の苦しみを詠ずるべく、救国救民の詩風を提唱した。また、古体詩にも長じており、その詩の形式はきわめて多彩である。たとえば「梅花歌」という詩がある。

朝曦看到夕陽斜（暁の陽から夕日の落ちるのを見る）

の神童といわれた蒙古である。この蒙先生があるとき、「一路春鳩啼落花」（春の花散る季節に鳩が啼く）の一句を与えたところ、黄遵憲は「春帰何処去、鳥亦儘情啼」（春はいずこに行くのか、鳥も思いのままに啼く）と答えて、大いに先生を驚かせた。翌日また「一覽衆山小」（一覽する山々の小ささかな）を出題すると、彼は「天下猶為小、何論眼底山」（天下の小ささをみるに、いわんや眼下の山）と答え、まさに郷里の人々の絶賛するところとなったのである。

一八七六年（光緒二年）、順天郷試の挙人に合格、ほどなくして一八八〇年（光緒六年）、日本の大使館の参事官として派遣された。これは初代駐日清国公使の何如璋（一八三八—一八九一）という客家の先輩に認められてのことである。

また、イギリスの植民地・シンガポール、米国のサンフランシスコの総領事に派遣されても、優れた外交成績を収めており、当地の僑民はみな彼を称賛した。長い外交官生活の間、黄遵憲は何事をも立派にこなし、そのすばらしい外交手腕はいまでも多くの人にたたえられている。

黄遵憲は一八九一年（光緒十七年）十月、シンガポールの総領事に任命された。その当時、シンガポール及び諸島には、六十万人の華僑がいた。彼は着任すると、まっ先に自分の目で南洋各島を詳細に視察し、僑民の苦しみの実態を調査して、清政府に逐一報告した。そして、政府に着実に華僑・華裔の

生命の安全を守り、財産を保護することを要求した。

彼はまた、華僑の待遇と就職についても、深い関心を寄せた。当時、シンガポール一帯の華僑が集中しているところでは、イギリス植民国には「華民政務司」が設けられ、名義上は華僑の往来及びその他の事務を行うというが、実際は華僑に対して専ら難癖をつけ、無理難題を吹つけてばかりおり、甚だしきは、当地の無頼者とグルになって、華僑に金銭を強要したり、騙し取ったりすることもしばしばあった。黄遵憲はこのような実情を自分の目と足で突き止め、把握していた。そこで、イギリスの駐在総督に対し、華僑の集中するところでは、清朝の法律に倣って、華僑の財産を保護すべきことを要求した。これはそれまで屈辱外交ばかりやってきた清政府の対外外交史においては、きわめてまれな強い実務展開といえるものである。

また、清政府が一七一七年（康熙五十六年）に頒布した「禁海令」（華人の海外渡航禁止令）は、結局、華僑が故郷に帰りたくても帰れない、困った禁令でもあった。黄遵憲は何度も政府に上書して、この禁海令を解くと同時に、華僑を保護するよう要求した。そうした彼の努力の結果、ついに一八九三年（光緒十九年）九月、清政府は二百年近く施行してきた禁海令を廃止し、世界各地に居住する華僑にとって大いなる助け舟となった。

ルで四つの小会社を連合して「蘭芳公司」をつくり、客家の同郷人の利益を保護した。

この勢力範囲は、東は西ボルネオを流れる大河・カプアス河上流の新董^{シンタン}より、西はゴールドラッシュにわくボルネオ州西岸に達し、北は邦憂^{バンカ}、南は蘇加丹那^{ソカタナ}に及び、今日の蘭印ボルネオの大部分を占めた。「蘭芳公司」は同郷人相互扶助のための血縁や地縁による組織であるが、彼はその本部をマンドールに置き、数年のうちに南北数十キロに及ぶ金の産出地帯を管轄下に収めたのである。

羅芳伯は「蘭芳公司」が成立した一七七七年、大唐総長（大統領）となり、国号を蘭芳、年号を蘭芳元年と称した。また、マンドールを王都とし、その下に省・府・県を置くという客家人のシステムの優点を十分に取り入れた。外藩には、戴蕪、上侯、新黨等があり、同郷の同志・呉元盛は戴蕪を支配した。官吏制度はむしろ中国式であり、官服は上級官吏が中国服、下級官吏が洋服とされた。これは大統領制による初の共和国で、裁判所も政府もあつた。

こうして羅芳伯は地域の安定を長く保つことができ、その威信はいよいよ高まった。その後も、「蘭芳公司」は彼の指導の下に開拓が進められ、広大な地域を支配し、成員と統治権を有する一つの国家形態を確立したのである。当時、オランダの植民勢力はまだこの地域に及んでいなかったので、

「蘭芳公司」が一つの国のごとく一切の行政を取りしきったのであつた。彼は住民皆兵制を採り、黄金の長方形の旗に、太陰暦を採用した。また、各地に学校を設立し、客家語を公用語としたのである。

一七九五年の羅芳伯の死後、五代の大唐総長が立ったが、劉台二とオランダ人の謀略で国力はしだいに衰退した。劉台二は大唐総長を称し、オランダ人より甲必丹地域の管轄を任じられたものの、実力はすでに失われていた。そして「蘭芳公司」創設から百七年後の一八八四年、ついにオランダのために滅亡した。

しかし、蘭芳伯が客家の故里から導入した先進的な機械や技術は、全島の経済、文化、及び教育の発展をもたらし、当地の人々は「海王廟」「羅大哥祠」を建ててこれを記念し、灯明や線香が年中絶えないことからわかるように、羅芳伯を崇拜し続けてきたのである。

四、傑出した詩人、外交家・黄遵憲⁽⁹⁾

詩壇革命の旗手ともたたえられ、また優れた外交官でもあつた黄遵憲は、字を公度といい、一八四八年（道光二十八年）、広東省梅県生まれの客家人である。

十歳にしてすでに詩を学んだ。彼が通う塾の先生は、梅州

科書から抹殺されてしまった。また、ここ呉鳳郷を阿里山郷と改称するなどして、この伝説を歪曲したともいわれている。

産経新聞の一九九九年三月一日の夕刊に「揺れる呉鳳伝説」という記事があり、それはインタビューに応じて「何事もそうだが、別の政治的狙いや目的があつて過激な連中をそのかすやつがあるのだよ」とつぶやいたある老人の言葉で結ばれていた。

現在、嘉義にある呉鳳廟の朱色の門構えには、「阿里山忠王」という額字が掲げられてある。廟内のそこかしこに「仁必有勇」などの額字が掲げられ、その中に「舍生取義」という蒋介石元総統の字がある。意味は命を捨てて義を取るという。李登輝現総統の題字は「成仁取義」（義を取って仁を成す）である。これらを見てもかつての呉鳳に対する政府当局の態度がうかがえよう。

今、廟を訪れる人は昔ほど多くはなく、貧相にも見えた廟の建物は、何となく廃れゆく感じであるが、しかし、どんなに呉鳳廟が政治情勢の変化に揺さぶられて、廃れようとも、呉鳳伝説の中に生きている「舍生取義」、「捨生成仁」の意義は忘れてはならないものである。また正義の鑑としての呉鳳の精神とともに、先住民と漢人の争いの過去の歴史を歴史として受けとめ、さらに曹族たちの先祖が過ちを悟って悔い改

めたその勇気の偉大さも含めて、感動に満ちたこの物語の美しさをいつも心の奥底にしまっておきたいものである。

三、世界最初の共和国をつくった羅芳伯⁽⁸⁾

客家の開拓精神を東南アジアで高揚した第一人者といえ、インドネシアのカリマンタン島西部に「蘭芳公司」をつくった羅芳伯の名が挙げられよう。

羅芳伯は広東省嘉应州石扇保村の客家人である。彼は幼少の頃から、すでに将来は東南アジアに出かけて一大事業を興したいという大志を抱いていた。

清の乾隆三十七年（一七七二年）、五十余歳にして、志を果たすために国を出るのだが、自らの親戚・友人を百余名ほど募って、南方行きの船に乗った。

羅芳伯一行の船は南航を続け、ボルネオ・^{ボルネオ}崑甸のマンドールに進出した。カリマンタンには黄金とダイヤモンドが発掘されていたの幸いに、開発事業に乗り出したのである。

彼は同郷の華僑・呉元盛の力によって、カプアス河中流に到り、当地の土豪との争いでも、みごとこれを駆逐し、未開の奥地に入つては、金鉱等の開拓事業に精を出した。そしてついに自ら主権を掌握した。一七七七年、羅芳伯はマンドー

ここを治めてきたが、この野蛮な迷信の悪習をどうしてもなくすまでにはいかなかったことを、内心非常に悲しみ嘆いた。しかし、ついにきっぱりと覚悟を決め、厳かに高山族に向ってこう告げた。

「理由もなくただ人を殺すことは法に背くものである。しかし、それでもみなさんがどうしてもやるというならば、よろしい、そんなに首が欲しいというのであれば、明日の正午、わたしの役所の近くを一人の赤い着物を着て、赤い帽子をかぶった人が通りかかりますから、その人を殺して、その首を取って神様に捧げて祭りをしなさい。但し、その他のいかなる者にも絶対に手を出してはいけないぞ!!」と。

翌日の早朝から、数十人の曹族は、手に刀や弓矢を持って呉鳳のいる役所の付近にやって来て待機していた。正午近くになった時、一人の赤い衣裳をまとい、赤い帽子をかぶった人が白い馬に乗ってやってきた。

そこで待ち構えていた曹族たちは「赤い帽子に、赤い衣裳、この男だ!!」と叫んで飛び出してきて、みんなでどつと押しかけて、あつという間にその首を取ってしまった。そして歓声をあげて喜び合った。しかし、これらの若者たちがよく首をみると、「あつ! 呉鳳さまだ!!」取った首がなんと彼らが最も敬愛している、長い間、通事としてつとめていた呉鳳の首であったのである。彼らは慌てふためいて、なぜ呉鳳とい

うこんなよい人を殺したのかと後悔した。そして、みなが地べたに跪いて大声を張り上げて泣き崩れ、大変悲しんだ。これは一七六九年八月十日、呉鳳が七十一歳の時のことである。

曹族は呉鳳の自分の命を捨ててまで正しいことを通そうとする偉大な人格に感動し、ついに自分たちの首狩りという不当な行為を深く反省してこの悪習をやめた。これ以後、彼らには再び人を殺すという習慣はなくなったのである。そして敬愛する呉鳳を記念するために、彼を阿里山の神として尊び、神廟を建てて永遠に祭った。

「呉鳳さま」のことは、これまでもずっと長く台湾に語り継がれていた。嘉義市の郊外に建てられた呉鳳廟は、いまでも参拝する人が絶えない。

このように呉鳳のすばらしい生涯と、自分の罪を認めて悔い改める勇氣を持つ曹族の行為が、美談として戦前の日本統治時代にも戦後の中華民国に光復しても小学校の教科書には載っていた。当時、日本内地でもこの美談は教科書の中に編まれていた。また、毎年一回の学芸会でもよくお芝居として上演されていた。ところが数年前、いわゆる民主化の波に荒らされて、反体制側が一部の先住民たちをそそのかし、あれはつまらないものだ、歴史の根拠がないとか、少数民族を侮辱する話だといって、反対運動を起こし、ついに小学校の教

をして暮らしていた。

呉鳳は小さいときからとても聡明で、てきぱきした少年であつた。子どもの頃からいつも父親について山地の村落に行き、その先住民の高山族のところで商売の手伝いをしていた。こうして彼は高山族の言葉を覚え、その風俗や習慣も理解することができた。

十六歳の時、嘉義市に移住してきた。その当時は侵略者である漢人と先住民（曹族と呼ばれていた高砂族、または高山族）との間にいさかいが絶えなかつた。呉鳳は自らその語学力と正義感でもってその仲裁をしたりして親しまれていた。その頃、漢人に追われて山に逃げ込んだ先住民は時折、山から下りてきては、草叢にかくれて漢人の首を取るいわゆる「出草」をし、その勇敢さが英雄視されていた。

呉鳳は二十四歳の時、通事という役人に起用され、阿里山に派遣されてきて、そこで彼は高山族を管理する職についた。以来、彼は高山族同胞の生活を積極的に改善しはじめた。そして高山族と平地に住んでいる漢人との間の争いを解決した。誰もがこの呉鳳通事を非常に敬愛するのも極めて当り前のことであつた。

ところで、阿里山地区の高山族には、先述したようにずっと以前から人の首を取るという一種の奇妙で野蛮な風俗が伝わっていた。それは毎年の晩秋に人の首を狩って祭り、神様

の守護を祈り、翌年の農作物がたくさん収穫できるように願うものであつた。このことはそれ自体、大変な迷信である。呉鳳は通事という役職を命ぜられ、赴任してきたからには、あらゆる方法を講じてこうした狂気じみた野蛮な風習をなくそうと努力してきたが、なかなかその効果がみられなかつた。しかし、彼がこの悪習を絶とうと辛抱強く教育し、指導した結果、ついに彼らはこの説得をきき入れた。その説得とは、高山族に昔の戦争の時に殺された四十人余りの清朝の官吏兵卒の髑髏を毎年一つずつ祭りに用いることを約束させたものである。これでも呉鳳にとっては最大限の交渉努力であり、仕方のないことであつた。

こうして約四十年間、首狩りの習俗は途絶えた。しかしながら髑髏を使い尽くしたことで勇猛で名の通った狩猟部族、曹族は折あらば首狩りを復活したいと望んでいた。ちょうどその年（乾隆三十四年、一七六九年）に飢饉が起こり、高山族は食べものがなく、また悪い伝染病が発生した。そしてついには、呉鳳に再びいまままで通りに人の首を狩り、それを生けにえとして神にお供えさせてほしいと願い出てきた。呉鳳は困り果ててしまい、再三にわたって首狩りの習俗はよくないことを説いたが、高山族の曹族たちは一向にそれを聞こうとしなかつた。

呉鳳はこの山地に赴任して、およそ四十年余りの長い間、

彼は二十二歳の時、銓選考試に及第し、泉州同安県の「主簿」（主に文書典籍を管理する官職）に任じられた。治理の功績に優れており、また一ヶ所の規模の非常に大きな県学を設け、彼自身も常に講学に行った。彼の道を求める心は切実なもので、二十四歳の時、同安から数百里歩いて、延平県に行き、李侗（愿中）を先生として拝んだ。

李侗は程頤の四伝の弟子であり、朱子の父親と同窓でもあった。当時、すでに六十六歳の老人で、名利に淡泊な思想家であり、隠居して苦学すること四十年、毎日静かに坐して、人生の喜怒哀楽が生じる以前の「氣象」を体験した。彼は洛学をさらに詳しく研究して徹底し、体験の中から実践できたのである。ゆえに朱子は李侗に会ってから、嘆息して言った。「私は先生を拝見して以来、初めてしっかりと地を踏みしめて学問を研究できるようになり、また初めて以前仏老の学説を研究したことがみな誤りであったことを知りました」李侗は朱子に対して非常に尊敬し、自分の一生の研究の心得を彼に授けた。これ以来、朱子は二程の洛学を継承したのみならず、また北宋の各家の哲学思想を総合して、彼の一生の学説の基礎を奠定したのである。

朱子は三十三歳の年に、文学博士に昇格した。宋の高宗が亡くなり、孝宗が即位し（一一六二年）、新しい皇帝は士大夫に国家の政治に対する意見を提出するよう求める詔書を下

した。朱子は孝宗に上書し、儒家の「帝王の学」を重視し、仏家と道家の理論を棄て、「事物の理を追究し、知識を推し広める」ことから始め、「意志が誠実で、心が正しく」古代聖人の道を学べば、「国を治め、天下を平定する」ことができる」と勧め、同時に金人との講和に極力反対した。彼は「今日の計は、政事を修めて夷狄を排することにすぎない。しかしその計が適時に定まらないのは、講和の説がそれを誤らせたからである。今、敵は我々にとって共に戴くことのできない仇であるから、決して和してはならない」と言った。

彼がこのように和議に反対したのは、まさに彼の父が秦檜の和議に不満であったことと同じである。しかし、当時権力と地位のあった湯思遠らは極力和議を主張し、朱熹の主張を排斥した。その結果、孝宗ははまだ彼を重用せず、ただ一人の文学博士として任じたが、実際には何の実権もない職だった。一年余り後に、朱子はこれに飽きて家に帰って研究と講学に専ら従事し、道を弘める教育に没頭したのである。

二、命を捨てても大義を守る呉鳳⁽⁷⁾

呉鳳は一六九八年、清の時代に、福建漳州府平和県の客家人として生まれた。彼は幼少の頃、父母に随って台湾に渡り、嘉義県竹崎郷鹿溝村に住んだ。彼の父はそこで雑貨店の商売

すでにふれてきたように安徽省婺源の客家人であるといわれる彼は元晦、また仲晦と号したが、続いて前後して自ら晦菴、晦翁、雲谷老人、滄洲病叟、遜翁とも称した。宋の高宗の建炎四年（一一三〇年）に生まれ、寧宗の慶元六年（一二〇〇年）に享年七十一歳で亡くなった。彼の死後、「文」というおくり名が与えられ、世の人々は「朱文公」と称した。また死後に歴代爵位を贈られ、孔子廟に従って祀られ、士人（知識人）として敬い崇められた。

彼の父親の名は松、字は喬年、号は建齋といい、人柄は正直で、北宋の周敦頤、張載の哲学に対してかなり研究した。進士に及第した後、朝廷に仕えたが、秦檜の金人に対する屈辱的な和議政策に賛同しなかったため、排斥され、福建に転勤させられて、尤溪県知事になった。朱子は尤溪で生まれたのである。尤溪は福建省に属していたので、彼が後に開創した学派をまた閩学と称した。

朱子は幼時から聡明であった。ある日、彼の父親が天を指さし、彼に向かって「天である」と言うと、彼は、「天の上は何か？」と問い返した。父親はこれを聞いて、平凡でないと思ったので、彼に孝経を読ませた。朱子は読み終わってから、本の上に「このようではなければ、人間ではない」と書いた。

彼は幼い頃、父親の指導の下に、勤勉で学問を好む習慣を

身に付け、さらに降参して一時の安逸を得る思想を憎んだ父の薫陶を深く受けて、愛国・報国の志を立てた。十四歳の時、父親が亡くなり、彼はその遺言によって、父の友人たる籍溪の胡憲（原仲）、白水の劉勉之（致中）、屏山の劉子翬（彦沖）の三人に従って学び、遺訓を遵守し、彼ら三人を先生として拝んだ。彼らは朱熹を子姪とみなし、特に劉勉之は娘を彼に嫁がせた。彼は十八歳の時、郷貢に、十九歳の時、進士に及第した。

朱子は進士に及第した後も、依然として読書に励み、中年になってから当時の状況を思い出して「学者たちはみななかなか読書しようとせず、私が科挙に及第した後も読書しようとする、方々からさえぎられたが、私はただ構わずに、一路邁進して自ら読書をしてきた」と言った。当時の儒生はみな読書を科挙への手段とし、目的を達成した後、一般の人々は本を放り出して読まず、官職を得るために人に取り入ろうとしたが、朱子は汚れた世俗に同調しようとせず、他人の嘲笑も気にしないで、まっすぐに『論語』『孟子』等の経書の研究に没頭し、つとめてあらゆる点から徹底的に追求し、その後の経書注釈のために基礎を打ち建てたのである。特に彼がその後、編著した『四書集注』は、中国の最も権威ある一冊の教科書であり、その影響の大きさは、まさに内外の教育史上まれに見るものと言えよう。

馬思聰、戴雨賢、映画監督の侯孝賢、サッカーの李惠堂など、枚挙にいとまがない。

漢 清 鍾
昨年（一九九九年）十一月四日から七日までクワラルンプールで第十五回世界客家懇親大会が催され、世界各地からおよそ二千人の代表が集った。大会の除幕式の挨拶に立ったマハティール首相は「クワラルンプールの発展史の中でもし華人『カピタン』（英植民地政府が華僑リーダーに贈った尊称）の貢献が歴史に記載されなかったらクワラルンプール発展史は完璧なものではない」と指摘した。とりわけ、客家人がマレーシア政府の部長（大臣）や各団体の要職に多く活躍していることについて高く評価した。

鍾
たしかにこれらの優れた才能で世人の注目を集めた人々は、記念すべき先達である。

本稿はきらめく客家の人物群像から、八名だけ取り上げて、簡単に紹介する。

一、儒学の新体系を唱えた朱熹

朱子と敬称された朱熹は、朱子学を形成した南宋の理学者として名高い。一一三〇年に生まれ、一二〇〇年に死去するまで、実に学識博大なること宋儒の中でも最も秀でた大学者である。彼は字を元晦、または仲晦とも称された。徽州婺源

（今の江西省）の客家の家系である。また福建省の建陽にも住居を構えたことがある。宋の高宗、孝宗、光宗、寧宗の四朝代に仕えた⁽⁶⁾。著作は典籍の注釈を数多くなし、経学、史学、文学、楽律、そして自然科学も研究した大碩学である。哲学では程頤、程頤の説を発展させ、とりわけ理気関係の学説を大いに高めた。五十年にわたる教育の仕事で、学問の目的は「理を窮め知を致し、自らの実践を通してその実を体験することにある」と主張した。『四書集注』、『詩集注』、『楚辞集注』及び門人が集纂した『朱子語類』、清の李光地等の編纂した『朱子大全』がある。以下、朱子が終生、努力を惜しまなかったとされる「道を弘める」教育と研究著作について考察してみた。

ここ七、八百年来、中国の教育は朱子の師道の影響が最も深く大きいと言えよう。彼は孔子の大道を継承し、いたるところで身をもって範を示し、人に「事物の理を追究して知識を推し広め、実践して自ら穏やかに処する」ことを教えた。彼はただ宋代における一人の学問を好んで倦まず、人に教えて厭わない偉大な教師であったのみならず、同時に彼の一生涯の儒学上の貢献は、まさに孔子以後の第一人者と言ってよいと、王煥琛は力説している。

朱子と王陽明が並称され、二人とも客家出身で儒学を発展させたことはよく知られている。

客家の傑出した人物に関する研究

要約

中国大陆でも、台湾でも、客家の人口は決して多くはないが、なぜか多方面に人材を輩出している。中華人民共和国でも尊敬されている中華民国の国父・孫父と、⁽¹⁾革命に情熱をかけ、若き血を流した黄花岗七十二烈士の半数以上は客家であった。中国史上はじめて直接選挙で選ばれた台湾総統の李登輝、中国を改革開放に導いた鄧小平、⁽²⁾シンガポール建国の父、李光耀、及び現首相の吳作棟、⁽³⁾フィリピンのコラソン・アキノ元大統領はみな客家の血が流れている。

台湾最大野党の前主席・許信良も台湾中壢出身の客家である。そして毛沢東とともに中華人民共和国をつくった朱徳、中国の前首相・李鵬、現首相・朱鎔基、副首相・鄒家華、前共産党総書記・胡耀邦、前国家主席・楊尚昆、四人組打倒の葉剣英元帥等、現在の中国の政治リーダーにも、客家出身者

がきら星のごとく肩を並べている。

また、歴史上の人物にしても、唐の名宰相・張九齡、名將・郭子儀、宋の兵飛、朱熹、歐陽修、文天祥、⁽³⁾明の王陽明、袁崇煥、明末の遺臣で徳川光圀公の師匠として儒学を教えた朱舜水、清の洪秀全、⁽⁴⁾楊秀清、石達開、黄遵憲、台湾抗日義士の唐景崧、劉永福、丘逢甲、吳湯興、徐驤、⁽⁵⁾羅福星、清末抗清義士の鄒容、温生才、朱執信、廖仲愷らはみな客家の出身である。

東南アジア等、海外で活躍した人材も多い。なかでも、大唐客長の羅芳伯、東南アジアの巨商・張振勲、タイガーバーム王・胡文虎、ハートヤイ開拓の始祖・謝枢泗、バンコク銀行の陳弼臣、在米フィクサー・陳香梅、マレーシア大蔵副大臣・黄思華、カナダ総督ゴビービーンツの母親、ネクタイ王・曾憲梓らがよく知られている。

また、著名な文学者の郭沫若、林海音、鍾肇政、音楽家の

鍾 清 漢

キーワード 客家学・人物・研究